

火星



七曜抄

山尾玉藻

人好きで人嫌ひなり吾亦紅

蒲は穂となる食べながら笑みながら

末枯や樋掃いてゐる昼の音

崩れ築体操服の子がひとり

色鳥の渡り炮烙まだ熱き

雁や川沿ひの屋根くろぐろと

蔓荔枝見に立つ月の暈かな

桃食うて夜の気配を見まはしぬ

測量士秋の行く手へ眼をほそめ

敗荷の水へ突き出す日章旗

火星作品 山尾玉藻選

盆 礼 や 水 音 た か き 飛 鳥 川 大和郡山 城 孝 子

ね ころ ん で 同 じ 額 や 盆 の 風

虫 売 り の 虫 の 音 積 ん で 去 に け り

た て が み の 秋 日 を 溜 め て 戻 り 来 し

戒 壇 院 一 段 づ つ の 昼 の 虫

草 に 舟 引 き あ げ て あ り 魂 祭 八幡 飯 塚 糸 子

鳴 神 の こ ろ が り ゆ け る 茶 白 山

風 の き て 草 山 の 喜 雨 し ら せ け り

水 桶 の 三 日 留 守 す る 小 萩 か な

新 涼 の 兎 の 耳 の 草 ご も る

す り 減 つ て ゐ る 樹 の 股 に 帰 省 か な 明石 戸 栗 末 廣

大 銀 杏 か ら 杉 山 へ 夕 郭 公

ひ ぐ ら し へ 向 け る 直 哉 の 机 か な

垣の縄途切れしところ萩白し
八月の記憶たしかに不たしかに
おとろへし足にはじまる晩夏かな
誰にともなくつぶやきて更衣
子の泣ける家もろこしを焼く匂ひ
掛軸の雀も出でよ夕涼み
なかなかに惚けるものよ生身魂
杜の木の葉擦れに秋を知りにけり
接岸へ島の傾く盆三日
今生の遊びのたらぬきりぎりす
八月十五日わが贅肉を削りたし
雲井町松風町と秋立ちぬ
高きに墓低きに蕎麦の花ざかり
雨の中立つて休めり黄菅原
三面鏡開けば現るる秋蚊なり
青葉木菟宿の齒ぶらし使ひぬて
ひまはりの鉄の匂ひの帝午なり

東京 土屋 醉月
豊中 野澤 あき
西宮 米澤 光子

選のあとに

山尾 玉藻

ねころんで同じ額や盆の風 城 孝子

普段一緒に生活をしていない親兄弟等も盆や正月には集まって来るものである。似ている所としては眼、鼻、口などと言う事が多く、「額」は比較的珍しいであろう。この句では親子か兄弟かは解らないが、同じ方向で寝転んでいる「額」の同じさに驚いたのである。この作者にして掲句は特に優れているとは言えぬが、他の四句とも同等の高水準であった。

八月の記憶たしかに不たしかに 戸栗 末廣

こう言う抽象語を並べた作品は俳句形式には普通向かず、日頃から戒めてもいる。しかし掲句には兎に角先ず納得させるものがあった。「八月十五日」や「終戦日」と言わずに「八月の」とのみ言つて句柄が大きくなり、色々と想像をかきたてる。恐らく作者の年齢からして、物心つき始めた頃の意味の「記憶たしかに不たしかに」でもあろうが、それだけに拘らぬ方がよい。終戦時一歳であった私でさえ、色々な知識からか「八月」とは「記憶たしかに不たしかに」と納得させられる。こう言う句は絶対的共感が下地に無いと失敗する。

誰にともなくつぶやきて更衣 土屋 酔月

職を退いた者にとつて、「更衣」を何時しなければならぬとか、何時しようとかと言う気持は無い。自分の体に相談し暑くなつたと思う頃にするのである。「誰にともなくつぶやきて」は、家人が傍におられるのかも知れない。しかし独り言ととつた方がよいであろう。行為そのものは生活の一齣であるが、人生に裏打ちされた作品といつて良い。秀句である。

今生の遊びのたらぬきりぎりす 野澤 あき

体調を崩され三ヶ月余り病院とご自宅で療養されていたが、先日句会でお顔を拝見しほつとした。病中は気弱になるものである。「今生の遊びのたらぬ」は、もしかするともう二度と外出できないのではなからうかと言う思いの言葉だったかも知れない。「きりぎりす」に切ない情感がある。

虫の夜へ灯り洩らして生きてをり 柳生千枝子

例えば上五を「夜の虫へ」とすれば主体は作者になる。「虫の夜へ」は主体は虫である。作者の世界であつた昼も、夜ともなれば虫の世界に入れ替わる。「生きてをり」の表現の飛躍は秀作たる所以であるが、やはり切なく哀しい。

海暗しアイス最中を半分こ 大山 文子

「半分こ」の相手は親しい友人か子供さんかそれとも夫君か、やはり「海暗し」には夫が一番良く似合う。そうかと言って深刻な訳ではない。「アイス最中を半分こ」の稚拙な俗性を「海暗し」が打ち消している、ちよつとした佳句である。

ふたりして老を養ふ昼寝かな 波田美智子
総入歯外したくなる炎暑かな 渡辺 繁

美智子さんの「ふたりして」は勿論ご主人とである。年をとると暑い盛りの外出は控え目となる。テレビや新聞などを見たりするものの、暑い時期の「昼寝」は老夫婦の日課でもある。「老を養ふ」の洒落た措辞で俳諧が生れた。繁さんの作品は同じ暑さを詠いながら趣が全く違う。俳句と言う文芸形式から作者自身が「総入歯」と解するべきであろうが、そう拘ることもない。「入歯」を外した人の顎の周りの情けなく痩せ細った様子に涼しさを感じられたのであろう。獅子座作品へ甘え猫ちよいと蹴飛ばす炎暑かなも俳諧味充分。

首すぢに犬の息ある花火の夜 小林 成子

「花火」を待つ間は殊に暑く感じるものである。おまけに「首すぢに犬の息ある」とあれば尚のこと暑い。小型犬を抱えている人にすれば可愛いのであろうが、横にいる作者にすれば迷惑な話である。誰でもがこう言う情景に出会った筈である

が、作品として仕上げるのが作家の力である。

ときどきは寝息確かめ星月夜 福西 礼子

家人がご病気だと聞く。前にも申したように作者は眼がご不自由である。「寝息たしかめ」はその作者の不安の行為である。読者にもその不安な様子が真つ直ぐ伝わってくる。

花束のところどころに吾亦紅 弘野 せい

誰もが知っている景である。野山の吾亦紅の存在が吾亦紅であれば、掲句もまた吾亦紅なのである。ちよつと暗く淋しげな在り様が、「花束」の他の花を引き立てているのである。

秋風とふいになりたり今日の風 河野 かず

季節は日一日と変つて行くものであるが、「秋風とふいになりたり」もまた実感である。「ふいになりたり」は思ったままを述べた表現であるが、この稚拙な措辞が読者を不思議に納得させるのである。(以下略)

玉藻俳句鑑賞

青空を濁さぬやうに秋の蛇 玉藻

〔火星〕平成十五年十二月号より

「秋の蛇」は傍題に「蛇穴に入る」「穴まどひ」等があるが、夏の間の活動期を過ぎると秋も終りの頃穴に入って冬眠する。

「秋の蛇」が目にとまった。そろりそろりと穴を探しているのか、まだ獲物を物色しているのか、暫く蛇との対面が続く。その動きは美しい秋空を濁さないようにとの意図と感じとられたのだ。秋の蛇の動き、それは自然そのものの動きで、青空も蛇もすべて自然に帰するという先生の思いに惹かれた。

（高子）



恒星巻

杉浦典子

発掘の柱地にあり夕焼くる
いわし雲望遠鏡をあふれ出づ
疲れ易きは母より継ぎぬ秋の雲
白鳥の羽根浮いてをり秋の湖
花野来てハイジの村に着きにけり

小池槇女

大東由美子

わらび餅の売声裏の道通る
田植田に踏切の鐘響きけり
昼寝ぐせ植田の風の涼しさに
田植機の音に目覚めし障子かな
夏落葉腰低く掃く夕日中

今朝秋の腓返りの力なる
頂の見えて来たりし破れ傘
白露かなすぐに透けゆく片栗粉
眼薬を白眼にさしぬ今朝の秋
赤帯の立ち上がりたる秋の口

城孝子

高尾豊子

ゼラニウムの匂ひの中に夏やせず
秋風や四角い貌の虫に会ふ
水際の牛の振り向く蕎麦の花
秋燕や中仙道は晴れ極み
花札の裏のくれなる蚯蚓鳴く

初西瓜叩いて母の忌日かな
夕さりのチャイム流れしトマト畑
葛這うて這うて天辺ありにけり
東は建築中なり赤とんぼ
冬瓜の頃の糸子さんにこにこす

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

吉田康子

ねこじやらし路上運転訓練中
大寺の空いちまいや稲雀
昆虫館出で来し夫の眼に力
夫とゆく早稲の花咲く暇道

永嶋みね子

冬瓜のごろりと太る昼の月
朝顔の路地に始まる機械音
盆の月背中あはせの駅の椅子
魚食べしあとの夜の町雁渡し

垣岡暎子

父さんの水やりはやし蚊喰鳥
膳いくつ積まれて久し萩の蔵
釣りたての大鯛届く大暑かな
ひぐらしや朝の仏間に灯ののこり

堀義志郎

秋風やペコちやん体操服着てる
灯涼し空也の像に長居して
樟に小鳥群れなす終戦日
からつぼの胃の腑で戻る花火の夜
夜釣火や波の底より人の声
蝸や病状固定となり重り
点滴の管付けをりし端居かな
土用芽や茶髪に乘せしハンチング

中上照代

妻も憂しと云ひ切る男土用風
蟬声に煽られて湧く入道雲
盆過ぎの座敷にふたり生身魂
盆過ぎの道白じろと続きけり

高松由利子

ひぐらしや海峽へ窓開け放ち
銀漢の蔵よりデキシールンドジャズ
霧隠り葉膳にのる菊脛
落書きをたどつてゆけば芒原